

ホセア書

第一章一これユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世にベエリの子ホセアに臨めるエホバの言なりニエホバはじめホセアによりて語りたまへる時エホバ、ホセアに言はく汝ゆきて淫行の婦人を娶り淫行の子等を取れこの國エホバに遠ざかりてはなはだしき淫行をなせばなり三是において彼ゆきてデブライムの女子ゴメルを妻に娶りけるがその婦はらみて男子を産り四エホバまた彼にいひ給ひけるは汝その名をエズレルと名くべし暫時ありて我エズレルの血をエヒウの家に報いイスラエルの家の國をほろぼすべければなり五その日われエズレルの谷にてイスラエルの弓を折べしと六ゴメルまた孕みて女子を産ければエホバ、ホセアに言たまひけるは汝その名をロルマハ（憐まれぬ者）と名くべしそは我もはやイスラエルの家をあはれみて赦すが如きことを爲さるべければなり七然どわれユダの家をあはれまんその神エホバによりて之をすくはん我は弓劍戰爭馬騎兵などによりてすくふことをせじハロルハマ乳をやめゴメルまた孕みて男子を産けるに九エホバ言たまひけるはその子の名をロアンミ（吾民に非ざる者）と名くべし其は汝らは吾民にあらず我は汝らの神に非ざればなり一〇然どイスラエルの子孫の数は濱の沙石のごとくに成ゆきて量ること多敷る事も爲しがたく前になんぢらわが

民にあらずと言れしその處にて汝らは活神の子なりと言れんとす二斯てユダの子孫とイスラエルの子孫は共に集り一人の首をたててその地より上り來らんエズレルの日は大なるべし第二章一汝らの兄弟に向ひてはアンミ（わが民）と言ひ汝らの姉妹にむかひてはルハマ（憐まるる者）と言へ二なんぢらの母とあげつらへ論辨ふことをせよ彼はわが妻にあらず我はかれの夫にあらざるなりなんぢら斯してかれにその面より淫行を除かせその乳房の間より姦淫をのぞかしめよ三然らざれば我かれを剥て赤體にしその生れいでたる日のごとくにしまた荒野のごとくならしめ潤ひなき地のごとくならしめ渴によりて死しめん四我その子等を憐まし淫行の子等なればなり五かれらの母は淫行をなせりかれらを生る者は恥べき事をおこなへり蓋かれいへる言あり我はわが戀人等につきしたがはん彼らはわがパンわが水わが羊毛わが麻わが油わが食物などを我に與ふるなりと六この故にわれ荆棘をもてなんぢの路をふさぎ垣をたてて彼にその徑をえざらしむべし七彼はその戀人たちの後をしたひゆけども追及ことなく之をたづぬれども遇ことなし是において彼いはん我ゆきてわが前の夫にかへるべしかのときのわが状態は今にまさりて善りきとハ彼が得る穀物と酒と油はわが與ふるところ彼がバアルのために用ゐたる金銀はわが彼に増あたへたるところなるを彼はしらざるなり九これによりて我わが穀物をその時におよびて奪ひわが酒をその季にいたりてうばひ又かれの裸體

をおほふに用ゆべきわが羊毛およびわが麻をとらん。○今われ  
 かれの恥るところをその戀人等の目のまへに露すべし彼をわが  
 手より救ふものあらじ。我かれがすべての言樂すなはち祝筵  
 新月のいはひ安息日および一切の節會をして息しめん。また  
 彼の葡萄の樹と無花果樹をそこなはん彼さきに此等をさしてわ  
 が戀人の我にあたへし賞賜なりと言しがわれこれを林となし野  
 の獸をしてくらはしめん。われかれが耳環瑪玉などを掛けてそ  
 の戀人らをしたひゆき我をわすれ香をたきて事へしもるもるの  
 パアルの日のゆゑをもてその罪を罰せんエホバかく言たまふ。四  
 斯るがゆゑに我かれを誘ひて荒野にみちびきいり終にかれの心  
 をなぐさめ。五かしこを出るや直ちにわれかれにその葡萄園を  
 與へアコル(艱難)の谷を望の門となしてあたへん彼はわかかり  
 し時のごとくエジプトの國より上りきたりし時のごとくかしこ  
 にて歌うたはん。六エホバ言たまふその日にはなんぢ我をふた  
 たびバアリとよはずしてイシ(吾夫)とよはん。七我もるもるの  
 パアルの名をかれが口よりとりのぞき重ねてその名を世に記憶  
 せらるること無らしめん。八その日には我かれら(我民)のため  
 に野の獸その鳥および地の昆蟲と誓約をむすびまた弓箭をを  
 り戰爭を全世界よりのぞき彼らをして安らかに居しむべし。九  
 われ汝をめとりて永遠にいたらん公義と公平と寵愛と憐憫と  
 をもてなんぢを娶り。○かはることなき眞實をもて汝をめとる  
 べし汝エホバをしらん。二エホバいひ給ふその日われ應へん我

は天にこたへ天は地にこたへ。三地は穀物と酒と油とに應へま  
 た是等のものはエズレルに應へん。三我わがためにかれを地に  
 まき憐れまざりし者をあはれみわが民ならざりし者にむかひて  
 汝はわが民なりといはん。かれらは我にむかひて汝はわが神なり  
 といはん

第三章 エホバわれに言給ひけるは汝ふたたび往てエホバに愛  
 せらるれども轉りてほかのもるもるの神にむかひ葡萄の菓子  
 愛するイスラエルの子孫のごとくそのつれそふものに愛せら  
 るれども姦淫をおこなふ婦人をあいせよ。われ銀十五枚おほむ  
 ぎ一ホメル半をもてわが爲にその婦人をえたり。三我これにいひ  
 けるは汝おほくの日わがためにとどまりて淫行をなすことなく  
 他の人にゆくことなかれ。我もまた汝にむかひて然せん。四イスラ  
 エルの子輩は多くの日わが君なく犠牲なく表柱なくエボデ  
 なくテラピムなくして居らん。五その後イスラエルの子輩はかへ  
 りてその神エホバとその王ダビデをたづねもとめ末日にをの  
 のきてエホバとその恩恵とにむかひてゆかん

第四章 イスラエルの子輩よエホバの言を聴けエホバこの地に  
 住る者と爭辨たまふ其は此地には誠實なく愛情なく神を知る  
 事なければなり。ただ詭偽凶殺姦淫のみにして互に相襲  
 ひ血血につぎ流る。三このゆゑにその地うれひにしづみ之にす  
 むものはみな野のけもの空のとりともにおとろへ海の魚もま  
 た絶はてん。四されど何人もあらずべからずいましむ可らず汝

の民は祭司と争ふ者の如くなれり五 汝は書つまづき汝と偕なる  
 預言者は夜つまつかん我なんちの母を亡すべし六 わが民は知識  
 なきによりて亡ざるなんち知識を棄つるによりて我もまた汝を  
 棄ててわが祭司たらしめじ汝おのが神の律法を忘るるによりて  
 我もなんちの子等を忘れん七 彼らは大なるにしたがひてますま  
 す我に罪を犯せば我かれらの榮を辱に變へ八 彼らはわが民の罪  
 をくらひ心をかたむけてその罪ををかすを願へり九 このゆゑに  
 民の遇ふところは祭司もまた同じわれその途をかれらにきたら  
 せその行爲をもて之にむくゆべし一〇 かれらは食へども飽ず  
 淫行をなせどもその數まさすその心をエホバにとむることを止  
 ればなり二 淫行と酒と新しき酒はその人の心をつばふニわが  
 民木にむかひて事をとふその杖かれらに事をしめす是かれら  
 淫行の靈にまよはされその神の下を離れて淫行を爲すなり三  
 彼らは山々の巔にて犠牲を献げ岡の上にて香を焚き橡樹 楊  
 樹 栗樹の下にてこの事をおこなふ此はその樹蔭の美しきによ  
 りてなりここをもてなんぢらの女子は淫行をなしなんぢらの兒  
 婦は姦淫をおこなふ一四 我なんぢらのむすめ淫行をなせども罰  
 せずなんぢらの兒婦かんにいんをおこなへども刑せじ其はなんぢ  
 らもみづから離れゆきて妓女とともに居り淫婦とともに獻物  
 をそなふればなり悟らざる民はほろぶべし一五 イスラエルよ汝  
 淫行をなすともユダに罪を犯さす勿れギルガルに往なかれベ  
 テアベンに上るなかれエホバは活くと曰て誓ふなかれ一六 イス

ラエルは頑強なる牛のごとくに頑強なり今エホバ恙羊をひろき  
 野にはなてるが如くして之を牧はん一七 エフライムは偶像にむ  
 すびつらなれりその爲にまかせよ一八 かれらの酒はくされかれ  
 らの淫行はやまずかれらの楯となるべき者等は恥を愛しいたく  
 之を愛せり一九 かれは風の翼につつまれかれらはその禮物によ  
 りて恥辱をかつむらん  
 第五章 祭司等よこれを聽けイスラエルの家よ耳をかたむけよ  
 王のいへよ之にこころを注よさばきは汝等にのぞまんそは我  
 らはミズパに設ぐる網タボルに張れる網のごとくなればなり二  
 悖逆者はふかく罪にしつみたり我かれらをことごとく懲しめん  
 三 我はエフライムを知るイスラエルはわれに隠るるところ無し  
 エフライムよなんぢ今すでに淫行をなせりイスラエルはすでに  
 汚れたり四 かれらの行爲かれらをしてその神に歸ること能はざ  
 らしむそは淫行の靈その表にありてエホバを知ることなけれ  
 ばなり五 イスラエルの驕傲はその面にむかひて證をなしその罪  
 によりてイスラエルとエフライムは仆れユダもまた之とともに  
 たふれん六 かれらは羊のむれ牛の群をたづさへ往てエホバを尋  
 ね求めん然どあふことあらじエホバ既にかれらより離れ給ひた  
 ればなり七 かれらエホバにむかひ貞操を守らずして他人の子を  
 産り新月かれらとその産業とをともに滅さん八 なんぢらギベア  
 にて角をふきラマにてラツパを吹ならしベテアベンにて呼はり  
 て言へベニヤミンよなんぢの後にありと九 罰せらるるの日にエ

フライムは荒廢れん我イスラエルの支派の中にならず有るべきことをしめり。ユダの牧伯等は境界をつつすものごとくなれり我わが震怒を水のごとくに彼らのうへに斟かん。エフライムは甘んじて人のさだめたるところに従ひあゆむがゆゑに鞫をうけて虐げられ圧られん。ニわれエフライムには靈のごとくユダの家には腐朽のごとし。ニエフライムおのれに病あるを見ユダおのれに傷あるをみたり。斯てエフライムはアツスリヤに往きヤレブ王に人をつかはしたれど彼はなんぢらを醫すことをえず。又なんぢらの傷をのぞきさることを得ざるべし。四われエフライムには獅子のごとくユダの家にはわかき獅子のごとし。我しも我は抓擗てさり掠めゆけども救ふ者なかるべし。五我ふたたびわが處にかへりゆき彼らがその罪をくいてひたすらわが面をたづね求むるまで其處にをらん。彼らは艱難によりて我をたづねもとむることをせん。

第六章一 來れわれらエホバにかへるべし。エホバわれらを抓擗たまひたれどもまた醫すことをなし。我儕をうち給ひたれどもまたその傷をつつむことを爲したまふ可ければなり。ニエホバは二日ののちわれらむ活かへし。三日にわれらを起せたまはん。我らその前にて生ん。ニこの故にわれらエホバをしるべし。切にエホバを知ること求むべし。エホバは晨光のごとく必ずあらはれいで雨のごとくわれらにのぞみ。後の雨のごとく地をうるほし給ふ。四エフライムよ我なんぢに何をなさんや。ユダよ我なんぢに何をなさんや。なんぢの愛情はあしたの雲のごとくまたただちにきゆる露のごとし。五このゆゑにわれ預言者等をもてかれらを撃ちわが口の言をもてかれらえを殺せり。わが審判はあらはれいづる光明のごとし。六われは愛情をよるこびて犠牲をよるこばず。神をしるを悦ぶこと燔祭にまされり。七然るに彼らはアダムのごとく誓をやぶりかし。こにて不義をわれにおこなへり。ハギレアデは惡をおこなふもの。邑にして血の足跡そのなかに徧し。九祭司のともがらは山賊の群のごとく伏伺して人をそこなひシケムに往く。大路にて人をころす。彼等はかくのごとき惡きことをおこなへり。一〇われイスラエルのいへに憎むべきことあるを見たり。かの處にてエフライムは淫をおこなふ。イスフルは汚れたり。ニユダよ我わが民の俘囚をかへさんと。きまた汝のためにも種刈をそなへん。

第七章一 われイスラエルを醫さんと。きエフライムの窓とサマリヤのあしきわざと露るかれらは詐詭をおこなひ。内には偷盜いり。あり外には山賊のむれ掠めさるあり。ニかれら心にわがその一切の惡をしたためたることを思はず。今その行爲はかれらを圍みふさぎて。皆わが目前にあり。ニかれらはその惡をもて王を悦ばせ。その詐詭をもてるもの。牧伯を悦ばせり。四かれらはみな姦淫をおこなふ者にして。パンを作るものに焼るる爐のごとし。捏粉をこねてその發酵ときまでしばらく火をおこすことをせざるのみなり。五われらの王の日に。もろもの牧伯は酒の熱によりて疾し。王は嘲るもの。ととも。に手を伸ぶ。六かれら伏伺するほどに。心を爐の

ごとくして備をなすそのパンを焼くものは終夜ねむりにつき朝におよばばまた焰のごとく燃ゆ七かれらはみな爐のごとくに熱してその審士をやくそのもろもろの王はみな侍るかれらの中には我をよぶもの一人だになしハエフライムは異邦人にいりまじるエフライムはかへさざる餽餅となれり九かれは他邦人らにその力をのまるれども之をしらず白髪その身に雜り生れどもこれをさとらず〇イスラエルの驕傲はその面にむかひて證をなすかれらは此ももろの事あれどもその神エホバに歸ることをせず又もとむることをせざるなり一エフライムは智慧なくして愚なる鴿のごとし彼等はエジプトにむかひて呼求めまたアツスリヤに往くニ我かれらの往ときわが網をその上にはりて天空の鳥のごとくに引墮し前にその公會に告しごとくかれらを懲しめん三禍なるかなかれらは我をはなれて迷ひいでたり敗壞かれらにきたらんかれらは我にむかひて罪ををかしたり我かれらを贖はんとおもへどもかれら我にさからひて謊言をいへり四かれら誠心をもて我をよばず唯牀にありて哀號べりかれらは穀物とあたらしき酒のゆゑをもて相集りかつわれに逆らふニ我かれらを教へその腕をつよくせしかども彼らはわれにもとりて惡きことを謀るニ六かれらは歸るされども至高者にかへらず彼らはたのみがたき言のごとし彼らのもろもろの牧伯はその舌のあらしき言によりて劍にたふれん彼らは之がためにエジプトの國にて嘲笑をつくべし

第八章一ラツパをなんぢの口にあてよ敵は驚のごとくエホバの家へのぞめりこの民わが契約をやぶりわが律法を犯ししによるニかれら我にむかひてわが神よわれらイスラエルはなんぢを知れりと叫ばんニイスラエルは善をいみきらへり敵これを追ん四かれら王をたてたり然れども我により立しにあらざれば牧伯をたてたり然れども我がしらざるところなり彼らまたその金銀をもて己がために偶像をつくれりその造れるは毀ちすてられんが爲にせしにことならず五サマリヤよなんぢの犢は忌きらふべきものなりわが怒かれらにむかひて燃ゆかれら何れの時にか罪なきにいたらん六この犢はイスラエルより出づ匠人のつくれる者にして神にあらざりサマリヤの犢はくだけて粉とならん七かれらは風をまきて狂風をかりとらん種ところは生長る穀物なくその穂はみのらざるべしたとひ賣るとも他邦人これを呑んハイスラエルは既に呑れたり彼等いま列國の中において悦ばれざる器のごとく視做るるなり九彼らは獨あし野の驢馬のごとくアツスリヤにゆけりエフライムは物を餓りて戀人を得たり一〇かれら列國の民に物を餓りたりと雖も今われ彼等をつどへ集む彼らは諸侯伯の王に負せらるる重擔のために哀へ始めん一エフライムは多くの祭壇を造りて罪を犯すこの祭壇はかれらが罪に陥る階とはなれりニ我かれらのために律法をしるして數件の箇條を示したれど彼らは反て之を異物とおもへり三かれらは我に献ふべき物を献ふれども只肉をそなへて己みづから之を食

ふエホバは之を納たまはず今かれらの愆を記え彼らの罪を罰したまはん彼らはエジプトに歸るべし二四イスラエルは己が造主を忘れてもろもろの社廟を建てユダは塙をとりまはせる邑を多く増し加へたり然どわれ火をその邑々におくりて諸の城を焼くべし

第九章一イスラエルよ異邦人のごとく喜びすさむ勿れなんち淫行をなして汝の神を離る汝すべての麥の打場にて賜はる淫行の賞賜を愛せり二打場と酒榨とはかれらを養はじ亦あたらしき酒もむなしくならん三かれらはエホバの地にとどまらずエフライムはエジプトに歸りアッスリヤにて汚穢たる物を食はん四彼等はエホバにむかひて酒を灌ぐべき者にあらずその祭物はエホバの悦びたまふ所にあらずかれらの犠牲は喪に居ものものパンのごとし凡てこれを食ふものは汚るべし彼等のパンは只おのが食ふためにのみ用あべくしてエホバの家に入るべきにあらず五なんぢら集會の日とエホバの節會の日は何をなさんとするや六視よかれら滅亡の故によりて去ゆきぬエジプトかれらをあつめメンピスカれらを葬らん蒺藜かれらが銀の寶物を獲いばら彼らの天幕に蔓らん七刑罰の日きたり應報の日きたれりイスラエルこれを知らん預言者は愚なるもの靈に感じたるものは狂へるものなりこれ汝の惡おほく汝の怨恨おほいなるに因るハエフライムは我が神にならべて他の神をも佇望めり預言者の一切の途は鳥を捕ふる者の網のごとく且その神の室の中にて怨恨を懐け

り九かれらはギベアの日のごとく甚だしく惡き事を行へりエホバはその惡をこころに記てその罪を罰したまはん一〇在昔われイスラエルを見ること荒野の葡萄のごとく汝らの先祖等を見ること無花果樹の始にむすべる最先の果の如くなしに彼等はバアルペオルにゆきて身を恥辱にゆだねその愛する物とともに憎むべき者とはなれり二エフライムの榮光は鳥のごとく飛ざらん即ち産くことも孕むこともなかるべし三假令かれら子等を育つるとも我その子を喪ひて遣る人なきにいたらしめん我が離る時かれらの禍大なる哉三われエフライムを美地に植てツ口のごとくなししかどもエフライムはその子等を携へいだして人を殺すに付さんとす四エホバよ彼らに與へたまへ汝なを與へんとしたまふや孕まざる胎と乳なき乳房とを與へたまへ一五かれらが凡の惡はギルガルにあり此故に我かしこにて之を惡めりその行爲あしければ我が家より逐いだし重て愛することをせじその牧伯等はみな悖れる者なり一六エフライムは撃れその根はかれて果を結ぶまじ若し産ことあらば我その胎なる愛しむ實を殺さん一七かれら聽従はざるによりて我が神これを棄たまふべしかれらは列國民のうち流離人とならん

第一〇章一イスラエルは果をむすびて茂り榮る葡萄の樹その果の多くなるがままに祭壇をましその地の饒かなるがままに偶像を美しくせり二かれらは二心をいだけり今かれら罪せらるべし神はその祭壇を打毀ちその偶像を折棄てたまはん三かれら今い

ふべし我儕神を畏れざりしに因て我らに王なしこの王はわれらのために何をかなさんと四かれらは虚しき言をいだし偽の誓をなして約をたつ審判は畑の敵にもえいづる茵陳のごとし五サマリヤの居民はベテアベンの憤の故によりて戦慄かんその民とこれを悦ぶ祭司等はその榮のうせたるが爲になげかん六憤はアツスリヤに携へられ禮物としてヤレブ王に獻げらるべしエフラムは羞をかうむりイスラエルはおのが計議を恥ぢん七サマリヤはほろびその王は水のうへの木片のごとしハイスラエルの罪なるアベンの崇 邱は荒はてて荆棘と蒺藜その壇のうへにはえ茂らんその時かれら山にむかひて我儕をおほへ陵にむかひて我儕のうへに倒れよといはん九イスラエルよ汝はギベアの日より罪をかせり彼等はそこに立り邪惡のひとびとを攻たりし戰爭はギベアにてかれらに及ばざりき一我思ふままに彼等をいましめん彼等その二の罪につながらん時もるもの民あつまりて之をせめん二エフラムは馴されたる牝牛のごとくにして穀をふむことを好むされどわれその美しき頸に物を負しむべし我工フラムに軛をかけんユダは耕しヤコブは土塊をくだかん三なんぢら義を生ずるために種をまき憐憫にしたがひてかりとり又新地をひらけ今はエホバを求むべき時なり終にはエホバきたりて義を雨のごとく汝等のうへに降せたまはん三なんぢらは惡をたがへし不義を穫をさめ虚偽の果をくらへりこは汝おのれの途をたのみ己が勇士の數衆きをたのめるに縁る一四この故に

なんぢらの民のなかに擾亂おこりて汝らの城はことごとく打破られんシャルマンが戰鬥の日にベテアルベルを打破りしにことならず母その子とともに碎かれたり一五なんぢらの大なる惡のゆゑによりてペテル如此なんぢらに行へるなりイスラエルの王はあしたに滅びん

第一章一イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ我わが子をエジプトより呼びだしたり二かれらは呼るるに隨ひていよいよその呼者に遠ざかり且もるものバアルに犠牲をささげ離る偶像に香を焚り三われエフラムに歩むことををしへ彼等をわが腕にのせて抱けり然どかれらは我にいやされたるを知らず四われ人にもちある索すなはち愛のつなをもて彼等をひけり我がかれらを待ふは軛をその腮より擧ぐるもののごとくにして彼等に食物をあたへたり五かれらはエジプトの地にかへらじ然どかれらがエホバに歸らざるによりてアツスリヤ人その王とならん六 劍かれらの諸 邑にまはりゆきてその關門をこぼち彼らその謀計の故によりて滅さん七わが民はともすれば我にはなれんとする心あり人これを招きて上に在るものに屬しめんとすれども身をおこすもの一人だになし八エフラムよ我いかで汝をすてんやイスラエルよ我いかで汝をわたさんや我いかで汝をアデマのごとくせんや争でなんぢをぜボイムのごとく爲んやわが心わが衷にかはりて我の愛憐ことごとく燃おこれり九我わが烈しき震怒をほどこすことをせじ我かさねてエフラムを滅

すことをせじ我は人にあらず神なればなり我は汝のうちにいます聖者なりいかりをもて臨まじ。○かれらは獅子の吼るごとくに聲を出したまふエホバに隨ひて歩まんエホバ聲を出したまへば子等は西より急ぎ來らん。○かれらエジプトより鳥のごとくアツスリヤより鴿のごとくに急ぎ來らん我かれらをその家々に住はしむべし。是エホバの聖言なり。ニエフライムは謊言をもてイスラエルの家は詐偽をもて我を圍めりユダは神と信ある聖者とに屬きみつかずみ漂蕩をれり

第二章一エフライムは風をくらし東風をおひ日々詐偽と暴逆を増くはヘアツスリヤと契約を結び油をエジプトに餽れり。ニエホバはユダと爭辨をなしたまふヤコブをその途にしたがひて罰しその行爲にしたがひて報いたまふ。ニヤコブは胎にみし時その兄弟の踵をとらへまた己が力をもて神と角力あらそへり。四かれは天の使と角力あらそひて勝ちなきて之に恩をもとめたり。彼はホテルにて神にあへり其處にて神われらに語ひたまへり。五これは萬軍の神エホバなり。エホバは其記念の名なり。六然ばなんぢの神にかへり矜恤と公義とをまもり恒になんぢの神を仰ぐべし。七彼はカナン人(商賣)なりその手に詭詐の權衡をもち好であざむき取ことをなす。八エフライムはいふ誠にわれは富る者となれり我は身に財寶をえたり。凡てわが勞したることの中に罪をつべき不義を見いだす者なかるべし。九我エホバはエジプトの國をいでしより以來なんぢらの神なり我いまも尚なんぢを幕屋

にすまはせて節會の日のごとくならしめん。○我もろもろの預言者にかたり又これに益々おほく異象をしめしたり我もろもろの預言者に托して譬喩をまうく。○ギレアデは不義なる者ならず。彼らは全く虚しかれらばギルガルにて牛を犠牲に獻ぐかれらの祭壇は圍の畝につみたる石の如し。ニヤコブはアラムの野にげゆけり。イスラエルは妻を得んために人に事へ妻を得んために羊を牧へり。ニエホバ一人の預言者をもてイスラエルをエジプトより導きいだし一人の預言者をもて之を護りたまへり。四エフライムは怒を激ぶること極てはなはだしその主かれが流しし血をかれが上にとどめその恥辱をかれに歸らせたまはん

第三章一エフライム言を出せば人をのけり。彼はイスラエルのなかに己をたかうし。バアルにより罪を犯して死たりしが。今も尚ますます罪を犯しその銀をもて己のために像を鑄その機巧にしたがひて偶像を作る。是みな工人の作なるなり。彼らは之につきていふ犠牲を獻ぐる者はこの犢に吻を接べし。○是によりて彼らは朝の雲のごとく速にきえうする露のごとく。打場より大風に吹散さる穀殻のごとく。窓より出ゆく煙のごとく。ならん。四されど我はエジプトの國をいでてより以來なんぢの神エホバなり。爾われの外に神を知ことなし。我のほかに救者なし。五我さきに荒野にて水なき地にて爾を顧みたり。六かれらは秣場によりて食に飽き飽くによりてその心たかぶり。是によりて我を忘れたり。七

斯るがゆゑに我かれらに對ひて獅子の如くなり途の傍にひそみ  
 うかがふ豹のごとくならんハわれ子をうしなへる熊のごとく彼  
 らに向ひてその心腹を裂き獅子の如くこれを食はん野の獸これ  
 を攔斷るべし九イスラエルよ汝の滅ぶるは我に背き汝を助くる  
 ものそむくが故なり。汝のもろもろの邑に汝を助くべき汝の王  
 は今いづくにかあるなんぢらがその王と牧伯等とを我に與へよ  
 と言たりし士師等は今いづくにかある。われ忿怒をもて汝  
 に王を與へ憤恨をもて之をうばひたりニエフライムの不義は  
 包まれてありその罪はをさめたくはへられたりニ。劬勞にか  
 かれる婦のかなしみ之に臨まん彼は愚なる子なり時に臨みても  
 なは産門に入らず。我かれらを陰府の手より贖はん我かれら  
 を死より贖はん死よなんぢの疫は何處にあるか陰府よなんぢの  
 災は何處にあるか悔改はかくれて我が目にみえず。五彼は  
 兄弟のなかにて果を結ぶこと多けれども東風吹きたりエホバ  
 の息荒野より吹おこらん之がためにその泉は乾ひその源は涸れん  
 その積蓄へたるもろもろの寶貴器皿は掠め奪はるべし。六サマ  
 リヤはその神にそむきたれば刑せられ劍に斃れんその嬰兒はな  
 げくだかれその孕たる婦は剖れん

第一章 イスラエルよ汝の神エホバに歸れよ汝は不義のため  
 に仆れたりニ。汝ら言詞をたづさへ來りエホバに歸りていへ諸の  
 不義は赦して善ところを受納れたまへ斯て我らは唇をもて牛の  
 ごとくに汝に献げんニ。アッスリヤはわれらを授けじ我らは馬に

騎らじまたふたび我儕みづからの手にて作れる者にむかひわ  
 が神なりと言ひ孤兒は爾によりて憐憫を得べければなりと。我  
 かれらの反逆を醫し悦びて之を愛せん我が怒はかれを離れ去た  
 り五我イスラエルに對しては露のごとくならん彼は百合花のご  
 とく花さきレバノンのごとく根をはらん六その枝は茂りひろが  
 り其美麗は橄欖の樹のごとくその芬芳はレバノンのごとくな  
 らん七その蔭に住む者がへり來らんかれらは穀物の如く活かへ  
 り葡萄樹のごとく花さきその馨香はレバノンの酒のごとくな  
 るべし八エフライムはいふ我また偶像と何のあづかる所あらん  
 やと我これに應へたり我かれを顧みん我は蒼翠の松のごとし汝  
 われより果を得ん九誰か智慧ある者ぞその人はこの事を曉らん  
 誰か穎悟ある者ぞその人は之を知んエホバの道は凡て直し  
 義者は之を歩む然ど罪人は之に躓かん